

日本国際情報学会

ニュースレター 2013年10月号

特集「国」



「『国』について語ろう」。そんなことを言ったら右翼、下手したら国粹主義者のレッテルさえ貼られかねない。「それはオーバーだよ」と思う人もいるかもしれないが、実際にげない話の中で「国」の将来なんていう言葉がちよっと挟まっただけで「さすが。憂国の士！」と茶化されたことも一度や二度ではない。だから、どうも「国」について語ろうなんていうのは憚られる。

天下国家を語る、なんていう大上段に構えて高説をぶったり、わが国こそ世界で一番、などと自己満足しようという気もない。ただ単純に自分が生まれ育った国がよりよくなってほしい、日本人なら他国の人々から日本人ってすごい、日本に行ってみたくて思われたら嬉しくない筈はないだろうし、それが極々自然な人情というものだろう。

「国」について話をすると、「何言ってるの。大事なものは国じゃなくて国民でしょ」と批判されることもしばしばだ。しかし、みんなでこの国をもっとよくしていこうよ、という時の「国」とは、そこに暮らす人々、そこを祖国とする人々の共同体であって、国民を支配、統制する無機質な「国」のことだとは思っていない。国民なき国家なんてあり得ないのだから、いちいち説明なんか要らない。

経済力が大きくなってみんなの生活が豊かになってほしい。科学技術が発達し、自国のみならず世界中の人々に貢献できるようになってほしい。そんなふうになれば、自分自身は直接関わってなくても、同じ国民として誇らしい。野球やサッカーも世界一になりたいし、オリンピックの金メダルやノーベル賞受章者も大勢出て欲しい。自分たちの国の文化が世界で注目を浴びれば、なんだか自分が褒められているみたいで嬉しくなる。それは日本だけではなく、世界のどの国の人々にとっても共通する感情ではないだろうか。だから、どの国も様々な戦略を立てて進歩、発展を期するのだろう。

我が日本国際情報学会も、みんなで切磋琢磨してお互いに高めあい、数多ある学会の中で存在感を高めたいと思っているという意味では「国」、「国家」みたいなものかもしれない。学会員は日本人だけではない。中国、韓国などいろんな国の人たちが集まっている。堅い話はいい。面倒な理屈は抜きにして、たまにはみんなで「国」について語りましょう。

目次：

新たな「ふるさと」としての近代国家	2
アニメ先進国日本、ドラマ天国韓国	4
国の競争力は大学の教育研究で決まる	6
編集後記	8

新たな「ふるさと」としての近代国家

原口 岳久

国は空気や水のように、生まれた時から当たり前のよう存在している。このためわれわれが普段の生活において国について改めて考えることはあまりない。国政選挙が国の方向性を決めると言っても、国の基本的なあり方は既に固まっており、あとはその時々の問題にいかに対処していくかという選択に過ぎない。逆に国家体制の根本的変革や国の分裂といった問題に直面している人々は、国について毎日のように考えざるを得ない。しかし日本をふくめ先進国の多くはそのような状況にはない。

しかし今日当たり前のよう存在している国の姿も、歴史的に見れば決して当たり前ではない。近代国家という枠組みで見ても、わずか二百年ほどの歴史しかない。では近代国家と前近代国家の本質的な違いは何か。ここでは、この切り口から国について考えてみたい。

人はひとりでは生きていけない。生きていくためには必ず他者と協力し、助け合わなければならない。このような協力と助け合いのための単位を共同体と呼ぶ。すなわち共同体とは、諸個人が共同して身を守るための単位であり、共同して生産を行うための単位であり、困窮した場合に互いに助け合うための単位である。共同体を作ることによって人は生き延び、繁栄することができた。個人にとって共同体は、生存のためになくてはならない重要なものである。

前近代において共同体としての性格をもつ集団は、典型的には、農業や牧畜を生業とする村落共同体である。村は一つの独立した共同体として成立していた。多くの人々はそこで生まれ、そこで生活し、そこで生涯を終えた。困難に対しては共同で対処し、共同で農作業を行い、困ったときには助け合った。個人にとって村は生存のためになくてはならないものであり、村から追放されることは生存の危機を意味した。このため村（ふるさと）に対して強い愛着が育まれ、それは後に愛郷心などと呼ばれるようになった。

前近代において国は、武力を背景に少数の権力者が大多数の庶民を一方向的に支配する構造であった。庶民は、それ自体が一つの小宇宙とも言える村落共同体を形成していた。従って国は、少数の権力者が無数の小規模な共同体を支配する構造とも表現できる。ここでは権力者と庶民の間には大きな断絶がある。庶民にとって権力者や国という構造は雲の上のものであった。事実、権力者間の戦争や取引により国の枠組みはしばしば変わった。しかしそれにより村での生活が大きく変わることはなかった。

また権力者間で戦争が行われているときにも、庶民はそれとは無関係に、相手国と自由に往き来し、取引をすることもあった。戦争はあくまで権力者のみの間のことであり、実際に戦闘を行うのはほとんどが職業軍人であった。

しかしこのような状況は近代化とともに、正確には近代における急激な工業化とともに、大きく変わった。生産手段が農業主体から工業主体に変わっていくとともに、各国で急激に都市化が進行した。農村から都市に人々が移動し、都市人口が急速に膨れ上がった。それは都市が主たる生活の場になるとともに、農村が凋落していくことを意味した。

都市に出てきた人々は、ふるさとを失った「根なし草」であった。それはまた、彼らが旧来の共同体を失ったことを意味した。事実、工業化初期の都市生活は、労働者にとっては悲惨をきわめた。労働条件が過酷なだけでなく、失業や野垂れ死にという、農村ではなかった社会問題が噴出した。これは、かつて人々に安全網を提供していた村落共同体が失われ、剥き出しの弱肉強食の世界に人々が放り込まれたことを意味した。

他方国家には別の課題があった。工業化の進展とともに軍事技術が発達し、植民地獲得競争も激しくなるなか、外国に対抗するため国民を総動員して工業生産を拡大し、軍事力を増強する必要に迫られた。そのため一つには、言語や教育を全国で統一し、工業化に適応できる国民を作る必要があった。もう一つには、国家に献身的に尽くす国民を作り出すため、従来意識のうえでばらばらであった無数の庶民を精神的に統合する必要があった。このため言語や算術などの実務的な教育のほか、人々の帰属意識、忠誠心を国家に向けさせるための歴史教育、文化教育にも力が入られた。

また国民を精神的に統合し、効率的に動員するためにも、社会問題を国家は無視できなくなった。共産化の危険もあった。このため国家は一定の社会福祉的政策を導入し、失業者の救済も図った。

こうして近代国家は、かつて村落共同体が受けていたような愛着を国家に向けさせようとし、かつて村落共同体が担っていた相互扶助の機能を社会福祉という形で肩代わりしようとした。これは言わば、村に代わり国家が新たな「ふるさと」になろうという試みであり、かつての「愛郷心」を「愛国心」に転換しようとする試みであった。事実、国家が自らに付与しようとするイメージは、かつての「ふるさと」のイメージであった。人々の郷愁をくすぐることによって、愛国心を涵養しようとした。

こうして近代国家は新たな共同体として自らを主張した。この試みはかなりの程度成功した。かつての愛郷心に代わり、多くの人々は程度の差こそあれ愛国心を持っている（もちろんその試みが部分的に上手くいかず、少数派の分離独立問題を抱える国も多いけれども）。しかしその帰結の一つとして、国家間で争いが起きたときに、全ての国民が相手国の国民全体を憎むという、憎悪の巨大化が見られるようになった。前近代の権力者間の争いは庶民とは関係がなく、権力者が戦争をしているときに庶民が相手国と往き来することもあった。それと比べると近代の憎悪の巨大化は極めて危険であるように思える。事実、近年の日韓や日中で見られるように、少しばかりのプロパガンダにより国民間の感情は一気に悪化する。

今さら前近代に引き返す選択肢はわれわれにはない。われわれは国家を共同体として生きていくしかない。だからこそわれわれ一人ひとり、国家をよりよい共同体にしていくために労を惜しんではならない。他方時には近代国家の歴史を振り返り、その本質を冷静に見極めることによって、いたずらに他国民を憎悪する愚は犯さないようにすべきではないだろうか。



アニメ先進国日本、ドラマ天国韓国

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
鄭榮蘭

韓国では、長年にわたり日本の大衆文化の「開放」が行われず、輸入や流通などの公式な取引と、視聴を一般国民に対し規制してきた。しかし、1998年、金大中大統領の訪日を契機に韓国における日本文化開放が実現することになる。一方、日本では2003年頃から「韓流」、「韓国ブーム」と呼ばれる社会的現象が起こり、政治的には時々緊張した関係になるものの、近年日本と韓国との間の文化的交流は急速に進みつつある。

韓国では、つい最近まで日本大衆文化は公式には開放されず、また、日本製テレビ番組の殆どが放映禁止となっていたにもかかわらず、テレビアニメは放送の草創期から日本製であることを表に出さずに、韓国放送局の主力ソフトとして活用されつづけてきた。日本のアニメだけは密かに輸入が許可されていたのだ。1970、80年代頃、当時は開発途上国であった韓国は日本に対し、全く異なる2つのイメージを抱いていた。一つは、歴史的経緯からくる負(マイナス)の「国民情緒」をもつ国、もう一つは隣接する憧れの「先進国」であった。日本は先進国であり、アニメを含む大衆文化に関しても文化先進国でもあった。「アニメ＝日本産」という考えは、現在に至るまで確実に存在している。

日本は家電製品、アニメの先進国であるとのイメージが強い。家電製品については、韓国の家電製品も最近になって日本並みのレベルに達しているとの考えが多い。しかし、アニメに関しては、日本は、相変わらずアメリカとともに世界一の制作国であり、輸出国であることには間違いがない。国策を立てなくても「クールジャパン」は実現されている。

韓国での日本アニメの公式な販売は、『マジンガーZ』、『魔法使いサリー』(1975年)が最初であったという。従って、その以前から放送された『鉄腕アトム』、『ジャングル大帝レオ』など、アメリカなどを経由し韓国に流入した作品も多く存在していて、ディズニーのアニメとともに韓国人に親しまれてきた。このような状況からも、韓国において日本のアニメが日本のものであると明確に認識されなかった理由が分かる。私自身も子供の頃から、韓国で放送されているアニメは、何の疑いもなく、当然韓国製だと思い込んでいた。韓国で放送されていた殆どのアニメが、実は日本製だったという真実が分かったのは、日本に来てからのことである。その後、日本のアニメは『宇宙戦艦ヤマト』『キャンディキャンディ』『銀河鉄道999』『惑星ロボ・ダンガードA』『ドラえもん』『赤毛のアン』『ベルサイユのばら』『ドラゴンボール』などと続いた。

韓国人も『キャンディキャンディ』の過酷な運命を不憫に思って涙を流し、恵まれない環境で育ちながら卑屈にならず、天真爛漫でまっすぐな赤毛のアン個性的なキャラクターに共感を覚えた。また、正義感が強く、弱い立場の者・困窮した者には自身を犠牲にしつつ手を差し伸べる優しい心を持つ『鉄腕アトム』に正義感と人に対する優しさを学びつつ、日本のアニメによって子供の頃から夢を育んできたのである。

公式には禁止されていたはずの日本のマンガや日本のアニメが、実は40年以上も前から流入していたのだ。つまり、現在、中年世代の成長の過程には常に日本のマンガやアニメが存在し、その中で韓国国民も理想と希望を育んできたのである。

他方、韓国ドラマから始まった「韓流ブーム」の日本での起爆剤になったのは、2003年4月からNHK-BS2などで放送された『冬のソナタ』と言える。引き続き、2004年10月からは『宮廷女官チャングムの誓い』が、NHK-BS2で放映、後にDVD化もされ人気を博し、韓国時代劇にも関心が高まる契機になった。

そもそも日本人の多くは『冬のソナタ』など韓国ドラマのどんな魅力に魅かれたのか。『冬ソナ』では、ドラマの美しい風景と音楽に魅了され、儒教をもとにした家族主義に憧れた。純愛物語や映像の美しさが中年女性層の強い支持を受け、ドラマの舞台が韓国観光の目的地になった。主人公に、現在の日本人男性にはあまり見られない思いやりや紳士的な振る舞いを感じてそこに虚偽の像を作り、男性の理想像として「ヨン様」に憧れを抱きつつ、20～30年前の日本に存在したような、淡い初恋の映像に懐かしさと共感を得た。また、『チャングムの誓い』を通じて、華麗な李氏朝鮮文化や韓国宮廷料理の数々に興味を持ち始めつつ、数々の策謀に翻弄されつつも、まっすぐで強く生き抜こうとするチャングムの姿を描いたサクセスストーリーに感動したのだと分析できる。

このように、大作主義のアメリカ映画に飽きたりず、キリスト教倫理観に基づいた難しいヨーロッパ映画に入り込めない20代・30代の女性達も、ありえない家族関係に距離感を感じながらも、文化流入を規定する要因の一つの、文化的に類似しているほど受け入れやすいという文化的要因により、韓国ドラマに親しみを感じたのではないかと思う。

韓国国民はテレビドラマを見るのが好きで、テレビドラマに関する関心度が高い。このようにドラマの需要が多いため、各放送局は視聴率に非常に敏感に反応し、ドラマの視聴率競争が激しい。90年代半ばまでは、作家と演出者が企画した方向性に沿い脚本通りに展開されたドラマを見てきた。しかし最近では、インターネットの発達により視聴者も自由に声を上げるようになり、放送関係者は視聴者の声を採り入れつつ、より良い方向に番組が進行するよう努めている。各ドラマごとに視聴者掲示板を作り、より迅速に視聴者の反応をチェックしつつ視聴者の意見も積極的に反映していく。視聴者からも多様な意見を出してその意見が反映される場合、その呼応度はより高くなる。脚本では事故で亡くなる予定だったはずの主人公が、視聴者の要求により蘇ってくるストーリーも少なくない。即ち、放送日の直前に撮影することが一般化されているため、このようなことも可能なのである。韓国ドラマは殆んど事前製作制ではない。放送草創期には制作環境が整わなかったのを理由に、事前製作制は導入されなかったのであるが、最近では、視聴率を意識し過ぎて事前製作制の導入が難しくなっている。韓国製ドラマは、このように進化しながら、テレビ放送の多チャンネル化の波に乗って、アジア諸国に拡散している。

私は、日本のアニメの中で夢と希望を学んでいく韓国の若者、また韓国ドラマ、K・POPの影響を受けつつある日本の若者によって、今後の日韓関係が徐々に変わっていくのを期待している。歴史問題などの政治問題が両国の認識に一時的に障害にはなるものの、両国の関係を長期に亘って安定したものにしていくためには、文化交流の活性化が重要である。文化交流が、両国民の相互理解と信頼度を向上させ、将来的には新たな日韓関係の構築に向けた礎になると思われる。



国の競争力は大学の教育研究で決まる

符儒徳

「国」を語るとき、その国の大学の教育研究に言及せずして論じることができないだろう。もちろん、国によって大学の特徴や使命が異なる。いうまでもなく、中国と日本の大学も相違点が多々ある。一例をあげれば、日本の大学は殆ど4月春入学であるのに対して中国の大学は全て9月秋入学である。ところで、現代の大学は「人材育成・科学研究・社会貢献」という3つの基本機能をもつ。なかでもグローバル化が進むにつれ、人材の育成は洋の東西を問わず最重要課題となりつつある。これは近年日本でも活発に行われている大学FDの中身からも垣間見ることができよう。これまで形作ってきた大学は、急激な変化を前にして自らを適応させることを余儀なくされており、様々な模索が行われている。

私の知っている範囲内で、日本では東大やICUなどの教養学部が有名で歴史も長い。また、近年早大や宮崎国際大および東京女学館大などの大学は国際教養学部という新しい教養学部を設置したことから、教養教育はより重視される傾向にあると考えられる。だが、中国に目を転じてみれば「教養学部」を冠した学部は、2000以上を数える中国の大学のなかに見当たらない。それもそのはずだ。「教養教育」は中国語で「通識教育」(General Education)とよび、多くの大学は大学創立者や著名な学者の名前で呼んでいるからだ。例えば、北京大のそれは「元培学院」である。中国の大学は本格的に「通識教育」に力を入れ始めたのが2005年以降で、また2009年頃「博雅教育」(Liberal Education)プログラムを導入した大学もある。そのきっかけがグローバル化であることは否めない。グローバル化時代こそ、多角的視点をもつ人材、いわば複合型人才を育成すべきであるという共通認識があるからだ。グローバル化は複雑化でもあるゆえに、複雑化した問題を解けるのは複合型の人材でないと無理だろうし、そのような人材育成は「厚基礎寛口径」(基礎が厚く幅が広く)という目標をもつ教育システムでなければならない。そういう認識は中国の大学関係者の間で広がっている。現在、総合大学をはじめ、理工系および専門系などの大学で教養教育が実施されているが、その殆どは米国の文理学部で行われるような教育を「通識教育」あるいは「博雅教育」と理解しそれを模倣しているように見受けられる。

今の中国は各種人材に対してこれまでなかった非常に強い願望がある。このことは1990年代から現在まで実施されてきた一連の人材招聘計画や誘致計画からもわかる。例えば、「長江計画」(ChangJiang Scholars Program)や「千人計画」(Thousand Talents Program=The Recruitment Program of Global Experts)、「青年千人計画」など海外の一流研究機関で活躍されている中国人学者を対象にするものもあれば、「長江計画」(一部)や「863計画」(応用技術系計画)「973計画」(基礎理論系計画、The National Basic Research Program)や「国家傑出青年科学基金」(National Science Foundation for Distinguished Young Scholars)など国内研究者向けのものも多数ある。これらはどれもレベルが高く、競争は想像以上に激しい。その背景の1つに、2008年のリーマンショックで中国人学者や留学生の帰国ラッシュが始まったことがある。

何れにせよ、中国の大学は教養教育を徹底するとともに、国の政策や資金援助により基礎研究や最先端技術研究に全力投球で取り組んでいることが伺える。なかでも生命科学と医学が最重視され、毎年多くの国家資金が投入される。その結果、多くの優れた研究成果は世界のトップ雑誌であるNatureやScience、Cellなどに発表され、中国の大学も高く評価されるようになった。北京大・清華大などが欧米の一部の世界大学ランキングTOP100入りを果たした。これは実は1998年より施された「985工程」という中国国家戦略プロジェクトによる所が大きい。「985工程」とは当時の江沢民総書記が1998年5月に行われた北京大学100周年記念演説で提唱したことに因んで名付けられたものである。そのためか、それまでにあった小規模な大学や単科大学に限界があると感じられ、1999年頃から合併ブームが引き起こされた。北京大や清華大、復旦大、中山大など全国の有名な大学は挙って合併に踏み切った。結局、合併しなかった大学は全国でわずか数十校となったという。日本でも筑波大や阪大などの一部のトップクラス大学は合併した経緯があるが、今の中国のトップクラスの大学は全て合併したマンモス大学である。合併の良し悪しはともかく、合併すれば実力が評価されるだろうという期待感が強かったようにみえる。無論、合併した中国の大学には良い意味での質的な変化やシナジー効果も見られる。現時点で「985工程」大学として全国から三十数校の大学が選ばれており、その半数近くは世界一流大学の建設をうたっている。世界一流大学の基準は流動的なものの、中国に世界一流大学の誕生が期待されている。

さらに2011年から「2011計画」(協同创新中心=Collaborative Innovation Center=計画)が実行され、産学官連携により数百の「協同创新中心」が設置された。その中から第1期プロジェクトとして十数件が2013年5月、国に採択された。産学連携といえば、日本のほうが歴史が長いが、中国のスケールの大きさに驚く。例えば、ビッグデータの実用化を目指してモデル化される日本の都市は北九州市(2008年経済産業省より環境都市モデル都市に選定)や横浜市など数市だが、中国ではこれまでスマートシティの建設を宣言した都市は60市に上る。そのため、新たな産学官連携が生まれようとしている。それは「超級計算機」(スーパーコンピュータ)分野である。スパコンの世界トップ争いは欧米日中により熾烈を極めていく。半年に1度更新されるスパコンの性能ランキング「TOP500」で2011年11月から2回連続トップの座を獲得した「京」(K-Computer)に、日本政府はさらなる期待をかけて100億円増資している。その一方、2013年6月、同じTOP500の1位となった中国の「天河2号」(Tianhe-2)はその後さらに性能が強化され、2013年10月、中山大のキャンパスに配置、運用されるという。「天河2号」はもともと広州市のオーダーメイドで、中山大と国防科学技術大の合同研究開発によるものらしい。この中山大は2013年9月、米国カーネギメロン大(CMU)と手を組んで計算機科学を中心に、新しい「連合工程学院」(Joint Institute of Engineering)を創立したばかりの、中国トップクラス大学の代表格の1つである。このような国内外の大学による合同プロジェクトは、中国において稀ではないが、超一流の大学と手を組んで世界の最先端をゆく合同研究や教育が最大のポイント。実は2013年9月の時点で中国国内外合同プロジェクトの総数は何と1979件もあるという。そのうち、約半数は中国教育部の認可を得ている。欧米や香港の大学との合同によるものが大多数を占め、殆ど長江デルタと珠江デルタに集中しているのが大きな特徴である。それに、中国人の海外留学が年々増加の一途を辿っているため、中国国内外の各種人材の交流はより頻繁より親密になればなるほど、中国の競争力もアップするだろう。

紙面の関係でほんのさわりだが、最後に日本の「30万人計画」や「京都大学生特区」などにも期待したい。



編集後記

○…今回がニュースメールの特集を担当させていただいて2回目。前回同様に私個人の関心に基づいて設定したテーマが「国」。特集の冒頭を飾った原口さんとは、もう12年の付き合いである。民族紛争を研究対象とし、心理学や哲学にも造詣の深い論客である。氏から送られてきた原稿を一読して、原口さんらしいと感じた。彼自身も予めことわっていたのだが、率直に言ってかなり堅い内容だ。

このニュースメールは学会誌とは性格を異にし、気軽に読んで得した気分になってもらえるようなものを心掛けている。気軽に、という意味では路線から少し逸れている気もするが、原口さんがどんな主張を展開するか聴いてみたかった。というのも、実は密かに、個人的に彼に論戦を挑みたいという気持があったのだ。

論拠に少しでもあいまいなところがあると、氏は厳しい指摘を直球で投げ込んでくる。ゆっくりと穏やかな口調ながら理路整然、しかも筋道が通っていて隙がない。迫りくるブルドーザーの様である。私はいつも壁を背にして逃げ場を失った小動物のように、あえなく降参している。そこで今度はこちらから攻めてみようと思ったのだ。我ながら姑息なやり方だが、よく吟味して次回会う時まで完全武装して挑戦しようと思う。

○…鄭榮蘭さんと符儒徳さんとは面識がなかったが、韓国や中国の方にもどんな主張を展開してくれるかは是非聴いてみたいと思い、お願いした。鄭さんの原稿は、私が想定していたものとは全く異なり、いい意味で期待を裏切られた。拳に力のこもった主張を予想していたのだが、「アニメ先進国日本、ドラマ天国韓国」という変化球で来た。この見出しにすっかりやられた。読んでみると、実に面白い。

いろんな事情はあったものの、子供の頃にみんなが大好きだったドラえもんや銀河鉄道999が韓国の子供の間でも親しまれていたと思うと、日本人としてはやはり嬉しく誇らしい。

一方、近年、「冬のソナタ」が日本で大ヒットし、大勢の日本女性がヨン様の追っかけになり、冬ソナのロケ地は日本人観光客で賑わった。かつてほどではなくなったが、その後も韓国ドラマの人氣は根強い。韓国ドラマは確かに多くの日本人の心を捉えている。一部で見られる嫌韓デモ、ヘイトスピーチは、ドラマをはじめとする韓国の文化が日本で存在感を増していることに対する嫉妬心と、韓国に追い越されるという危機感から来ていると思えてならない。両国間には譲れない外交問題が横たわっているが、文化に関してはそれぞれ優れたところがあるのだから、それを素直に認め合えるよう日韓共に成熟したいものである。

○…鄭さんとは対照的に、符儒徳さんの主張は重厚である。中国のスーパーコンピューターの性能は世界トップクラスで、有人宇宙飛行もわが国に先駆けて成功させた。その理由が分かる気がした。

2011年に温州で起きた高速鉄道脱線事故とその後の善後処置にみるように、技術のみならず、安全に対する意識や信用についても、中国に未だ問題が山積していることは否めない。しかし、綿密な国家戦略に基づいた大学教育の成果は着実に表れているし、長期的視野に立った戦略により、今後もその勢いは続き、むしろ加速することだろう。

最近の東京では、松屋などの牛丼店のカウンターで見かける店員の殆どが中国人留学生である。面倒な客がいても真剣な表情で適切な対応をしている。慣れない異国日本で、将来の目標を実現させるため、懸命に働いて学費や生活費を稼ぎ勉学に打ち込んでいる彼らは、技術大国日本にとって、将来手強いライバルになるに違いない。

佐藤勝矢